

小樽商科大学での34年

藤井 栄一

1958年4月に小樽商科大学に着任して、すぐ担当したのは「経済原論」と3、4年のゼミナールでした。1992年3月に小樽商科大学を離れ、4月から新しい大学で担当しているのは「経済学概論」、「ミクロ経済理論」、それに、2、3年のゼミナールです。マイナーな工夫を別にすれば、講義内容に殆んど違いがありません。

周囲の状況は一変し、当時は「近代経済学」の講義が稀少で、小樽商科大学でさえ、この種の勉強を続けるのに適当かどうか疑われる状態だと感じられたのに、今日では「近経」という言葉さえ色あせたように見えます。

周囲がこのように変わっているのに、講義の内容を変えることができないことは、34年間の研究が無意味だったと評価されかねないと考えています。ただ、なにごとにも *gestation period* が必要だと思います。研究プロパーを離れても、図書館の機械化、大学紛争の収拾、大学移転問題、予算配分、大学組織の変更、国際交流、基金設定など、それぞれにかなりの準備期間が必要でした。

大学の標準的な教科書や参考書としてリファアされているものは、それぞれに特色をもっているように見えますが、それらで述べられていることを、そのまま講義する気にはなれません。と言って、満足のいく話もできません。小樽商科大学の頃にくらべると、時間の余裕ができそうで、少しでも満足できることをしたいと思っています。

それにしても、私にとっては、共に仕事をする機会にめぐまれた、小樽商科大学の教職員の先輩と同僚、ならびに小樽商科大学で開いていた土曜研究会に加わった方達に御礼を申し上げるしだいです。なかでも、経済学科の麻田、早見、井上、今、佐竹、栗田、商学科の久野、篠崎、中、社会情報学科の沼田、戸島、若林、企業法学科の青竹、清水の各教授から非常に多くのことを学びました。更に、山田家正学長、村山図書館長、秋山学生部長、渡辺短期大学部長には、組織改革途中の面倒な仕事を引き継いで頂いたことに御礼を申し上げねばなりません。